+博論書式3(論博書式3)

平成 ２９年　１月２３日

博士論文の審査結果の要旨

専攻	保健医療学専攻	分　　野	医療福祉学分野
学籍番号	１４Ｓ３０６３	院生氏名	松本明美
通学キャンパス	大田原キャンパス		
論　文　題　目	看護師の仕事と在宅介護の両立・継続を目指すための支援の検討		
審査結果（枠で囲む）	合格　　不合格		

＜審査結果の要旨＞

１．　研究の概要

（１）研究背景：高齢化社会の進展による看護職の慢性的な人材不足と、看護職自らの家族介護による転職・離職が増えているため、看護職の仕事と家族介護との両立が人材確保の視点からも課題となっている。しかし、家族介護者を看護師に限定し、仕事と看護の関係性を明らかにした研究は無い。

（２）目的：看護師の仕事と在宅介護の両立・継続の実態を明確にし、両立・継続のための支援ニーズを明らかにすること。

（３）方法：2つの看護職を対象とした実態調査と看護師への面接調査から構成されている。

①研究１：看護師の仕事と在宅介護の両立・継続に関する実態調査１。病院及び老健施設の看護職約1000名を対象とした自記式質問紙留め置き調査。属性、就労状態、介護状況、自己肯定感、健康状態、介護負担・肯定感他を統計的に分析した。

②研究2：看護師の仕事と在宅介護の両立・継続のプロセス検討（質的分析）。看護職15名を対象とし、半構造化面接を行い、事例分析とM-GTAにより質的分析を行い、構造の概念化を行った。

③研究3：看護師の仕事と在宅介護の両立・継続に関する実態調査２。在宅介護経験のある看護職243名を対象としたWeb調査。仕事・職場状況、介護状況、両立・継続・離職状況、両立支援制度利用状況、介護の見通し等を、統計的に分析した。

（３）結果

①研究１：介護経験者は13%。在宅介護経験者は女性、40～50代、勤務継続年数10年以上、常勤で交代勤務、介護期間は1年未満、介護同居が約7割。要介護者は自身の親が多く、要介護度は非該当、要介護3～5が多く、認知症が約半数、3割がなんらかの医療を在宅で受けていた。介護経験者自身の行っていた介護内容は、おむつ交換、清潔援助が多い。探索的因子分析では、「肯定的仕事意識」「自己肯定」「仕事困難」「生活充実」「社会生活制限」「要介護者否定」「介護依存」「家族協力」「要介護者肯定」「介護効力感」の 11 因子が導き出された。「仕事困難」を従属変数とした重回帰分析の結果では「介護者否定感情」に、「介護負担得点」を従属変数とした重回帰分析の結果では「家族協力」との因果関係が認められた。介護なし群の7割は介護との両立に高い不安を抱えていた。

②研究2：シュロスバーグ理論の枠組みに基づいた2つの対極した事例分析を行い、看護職の強みを生かし、あらゆる社会資源と人的環境を活用し、在宅療養ができる物的環境を工夫し、それらを転機の時期に合わせてうまく活用したことが、仕事と在宅介護の両立や継続に繋がったことを明らかにした。M-GTAの結果では、19のカテゴリー、54の概念が生成され、【両立のきっかけと始まり】【両立の継続・揺らぎ】【仕事と介護の両立の終結】の3つのモデルが構造化できた。

③研究3：243名の調査参加者のうち介護離職に至ったのは13名であった。「介護離職願望」の有無、「両立・継続困難感」の有無を従属変数とした2項ロジスティック回帰分析の結果、「介護離職願望」についての規定因子は「介護の協力者」「職場環境」「介護負担」となり、「両立・継続困難感」の規定因子は、「介護年代」「経済状況」「介護負担と肯定感」「職場環境」「両立支援制度の利用」となった。両立支援ニーズは、「在宅サービスの充実」「職場の理解/サポートの充実」「家族の支援と協力」「職場の勤務体制の改革」「自分の時間の確保」「自己の健康」であった。

（４）結論：看護師のアンビバレントな思いを踏まえ、介護離職予防及びワーク＆ケアのポジティブ・スピルオーバーを目指した両立・継続支援モデルと看護師の職場における介護期の働き方支援プログラム＜準備期、両立開始期、両立・継続期＞を試案した。

２．研究の倫理的側面
　研究１、２については、国際医療福祉大学研究倫理委員会の承認及び対象施設・対象者の病院・施設の倫理委員会の承認を得た（承認番号 14-Io85）。研究３は国際医療福祉大学研究倫理委員会の承認を得た（承認番号 16-Io-4）。

３．知見の新規性と価値について
　本研究で得られた新たな知見は、以下の①～⑤である。
①看護の仕事と在宅介護には強い関係性が認められる。「仕事困難」に在宅介護状況が密接に関係し、特に家族の協力が大きな影響を与えている。
②看護師独自のアンビバレンスが明らかとなり、このようなアンビバレントな状態で、揺らぎながら看護の仕事と在宅介護を両立・継続している。
③在宅介護を人生の転機とポジティブに捉え、その転機のタイミングに合わせて看護師としてのスキルをリソースとしてうまく活用することで、看護の仕事と在宅介護の両立・継続につながる。
④看護の仕事と在宅介護を両立・継続させる規定要因は、家族の協力に加え、職場の理解/職場のサポート、両立支援制度である。介護離職に至る看護師は少ないが、両立・継続の困難感は高い傾向があるため、いかに安定した両立・継続ができるかが支援課題となる。
⑤看護師の両立・継続におけるいくつかのアンビバレンスより、仕事を継続することが、介護にポジティブ・スピルオーバーし、在宅介護をすることで、さらに自己の成長にもポジティブ・スピルオーバーされる。看護の仕事を継続することと在宅介護をすることは、双方の両立・継続に大きな意味を成している。

　本論文は、看護師の仕事と在宅介護の両立・継続の実態を明らかとし、看護師が仕事と在宅介護の両立・継続のために必要な支援ニーズを明らかにした大変重要な研究である。

４．審査会を 12 月 2 日に開催した。まず、「ＢＰＳＤを表出する認知症高齢者の看護―攻撃的行動に対する看護師の捉え方とケアー（ヘルスサイエンス研究、第 15 巻第 1 号、2011 年）」を副論文として適当であると認め博士論文の提出資格を認めた。つぎに口頭試験を行い、各審査員の質問に対して適切に応答した。初回審査では、本論文における新規性が明確に記載されていないこと、著者の強調する点の考察が不十分であることについて論文の修正を求めたところ、期日までに適切に修正された。

５．以上の結果から、審査会の審査員全員は本論文が著者に博士（医療福祉学）の学位を授与するに十分な価値があるものと認めた。

論文審査担当者	主　査　　下　泉　秀　夫 副　査　　坪　倉　繁　美 副　査　　埴　岡　健　一